

ゆうそういわ

## #38 遊相醫話

作者：森立之（もり・たつゆき/りっし 1807-1885）

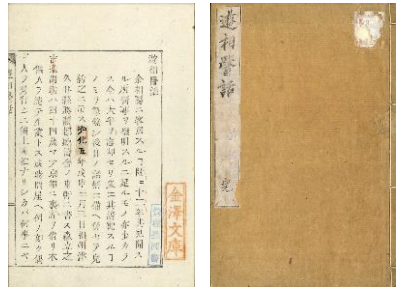
刊行：文久4年（1864）


 解題

## ■ 内容

福山藩医であった森立之が浪人中、相模国の津久井縣勝瀬村（現・相模原市緑区）に滞在した時に、主に医事に関する雑話を書きとめたもの。

およそ80話からなるが、冒頭第1話は、漢方医で日本近代医学中興の祖といわれる吉益東洞（よします・とう



[K49/137]

どう 1702-1773) の有名な逸話である。吉益は苦学時代に人形屋の取り持つ縁で山脇東洋を知り、有名になる糸口になったというものだが、本書が初出で以後さまざまな資料に掲載され、あたかも史実であるかのように考えられているが、根拠のある話ではないとのことである。

また、医事と関連する本草の記事も多く含んでいる。相模国内の津久井、大山・日向、大磯などで入手できる、草木及びその実やその下に生ずる菌類、虫魚、禽獣についてその効用を説いている。地域資料としても貴重な一書である。

巻頭の自序によれば、弘化5年(1848)にまとめられ、巻末にある門人中野定之の跋から16年後の文久4年(1864)に（木製）活字で出版されたことがわかる。

## ■ 作者

作者は森立之。字は立夫、幼名は伊織、のちに養真、さらに養竹と名乗った。立之は諱で、号は枳園（きえん）。漢方医の家に生まれ、伊沢蘭軒に学び

蘭門五哲の一人と称された。15歳で家督を継ぎ備後国（広島県）の福山藩医となったが、天保8年(1837)免職となり、以後の10数年間は相模国内を流浪、その間に本書を著した。やがて福山藩に帰参が許され、幕府医学所講師も務め、医書の編纂などにも従事した。本草家としても著名。主な著書には『経籍訪古志（けいせきほうこし）』（共編）、『神農本草経攷註』がある。

 本文を読む

< 翻刻 >


「遊相医話」（『鼠璞十種』第2巻 国書刊行会編 1916）[081.5/12/2]

「遊相醫話」（『杏林叢書』第4輯 吐鳳堂 1925）[490.9/1/4]

「遊相医話」（『神奈川県郷土資料集成 第7輯 紀行篇（続）』神奈川県図書館協会郷土資料編集委員会 1972）[K08/1/7] [213.7/19/7]

< 影印 >

「遊相医話」（『近世漢方医学書集成 53 森立之』大塚敬節・矢数道明編 名著出版 1981）※当館未所蔵

 参考文献

「森立之・約之父子」（『日本書誌学之研究』川瀬一馬著 講談社 1971）  
[020.11/1A]

※旧版『日本書誌学之研究』川瀬一馬著 講談社 1943[020.11/1]もあり

『近世漢方医学書集成 53 森立之』大塚敬節・矢数道明編 名著出版 1981  
※当館未所蔵